

## 第90回国際歯科研究学会 (IADR) に参加して

予防歯科学分野 廣 富 敏 伸

2012年6月20日～23日、ブラジルのイグアスで開催された国際歯科研究学会 (IADR) に参加して参りました。本稿では、学会の様子およびブラジルという日本から遠く離れた国について、私個人の視点から記事にします。

### ①南米大陸で、初の開催

第90回を迎えた IADR は、意外な事に南米大陸での開催は今回が初めてとのことでした。ブラジルは丁度日本の裏側に位置するため、日本との時差は10時間以上、そして季節は逆になります。つまり、日本の真夜中がブラジルの真昼に、そしてブラジルでの6月は日本で言うと12月に相当します。また、ブラジルまでの航空機搭乗時間は片道約22時間 (待ち時間含めず) と、ほぼ丸1日上空の上で過ごす必要があります。事前に分かっていた事ではありますが、これはかなり過酷でした。宮崎教授からの後日談として、「日本→アメリカのような、東回りの長旅はつらくなりがち」とのことでした。

このような地理的条件のためか、日本からの参加者はいつもの IADR に比べて少なく感じられました。新潟大学歯学部からの参加者も5～6名程度だったようです。その代わりに、地元ブラジルからの参加者がかなり目立ちました。日本人参加者が少なかった他の理由として、ブラジルの治安の悪さと黄熱病への心配もあったのかもしれませんが。今回の IADR は、開催場所がサンパウロからイグアスへと変更になった経緯がありますが、これはその治安の悪さによる……と、まことしやかに囁かれていたようです (確証は得られていません)。しかし実際には、学会はイグアス郊外の大型リゾートホテル等で行われたため、治安の悪さを意識する場面はありませんでした。また、かの野



口英世博士は黄熱病の研究中に感染し亡くなったと言われておりますが、そのウイルスを媒介する蚊が人を刺すのは、メスが卵を産むため栄養 (血液) をとる時だけとのことでした。結局、冬にあたる6月はほとんど心配のいらぬことが、現地に行ってから判明しました。

### ②学会場の環境

今回の IADR は、学会場の配置も一風変わっていました。まず、郊外の大型リゾートホテル2ヶ所にて各式典や口演が、そしてポスター発表はコンベンションホールで行われました。ホテルとコンベンションホールはかなり離れており、大型バスで参加者を輸送する方式となっていました。ところが、そのバスが約30分おきということもあり、やや不便を感じました。しかし学会場となったホテルは「ぜひ一度泊まってみたい」と感じさせる豪華さがありました (写真)。学会2日目の夜、GC主催の“Japan Night”がそのホテルで開催され、非常に盛況でした。

### ③ブラジルでの食事

機内食が5～6食続いたせいではないと思うのですが、ブラジルの食事はなかなか美味しく感じられました。ほぼ毎食お供させていただいた葎原教授に伺っても、やはりまずいものはなく、日本人の味覚にあうようでした。特にシュラスコというブラジル名物の肉料理（バーベキュー）は美味しく、現地での夕食4回のうち3回をそれにしたほどでした（残り1食はJapan Night）。そして夕食に肉となると、やはり赤ワインが欠かせないと思うのですが、いかがでしょう……？ シュラスコの夕食時、赤ワインのボトル1本を2～3名で空けたのですが、私はそう強くないにもかかわらず、次の日の朝、全く残っていませんでした。なぜなのか、その理由は今もって分かりません。

### ④イグアスの滝

イグアスは、世界3大名瀑のひとつがあることで有名です。イグアスがIADRの開催地に決まった後になって、私はそれを初めて知りました。イグアスの滝はアルゼンチンとの国境に沿っており、アルゼンチン側からとブラジル側から見た場合とでは、かなり違っているとのことでした。

### ⑤その他雑感

話が前後しますが、航空機がイグアスに着陸する際に見えた大地は、まさに「真っ赤」でした。水たまりも顔料を溶いたかのように真っ赤でした

が、それをカメラで写しても、不思議とその赤さは再現されないのでした。また夜間、空港の窓から見えた三日月は「下弦の月」、つまり月の下側が光っているのです。これには驚きましたが、どうしてそうなるのか、よく分かりません。ちなみに、排水口に水を流すと渦巻きが逆になる、と出発前にさんざん言われていたのですが、それを確認するのは忘れてしまいました。

またブラジルでは、一部を除いて英語がほとんど通じないようです。往路のサンパウロ国際空港内の薬局で、蚊よけの塗り薬（日本製は効かないらしい）を買おうとしても、英語はほとんど通じず、身振り手振りでようやく購入できました。そんな中、「こんにちは」と「ありがとう」のみ、ポルトガル語を覚えていきました。その甲斐あって、乗り物を降りる時に「オブリガード」と乗務員さんに言うと、やはり相手の反応（笑顔）がすばらしいのです。これは、2009年にタイの学会で経験した事一挨拶だけでも現地の言葉を！一を、ブラジルでも生かしたのでした。

本稿では、私の学会発表については記載しませんでした。実は、“J. Morita Junior Investigator Award”を受賞し、大変光栄に感じているところです。こちらは、機会があれば別な稿で、と考えております。

# Dysphagia Research Society 20<sup>th</sup> Annual Meeting に参加して

摂食・嚥下リハビリテーション学分野 辻 村 恭 憲

この度、カナダのトロントにて開催されました Dysphagia Research Society (DRS) 20<sup>th</sup> Annual Meeting (2012年3月8～10日) に参加してまいりましたので、御報告いたします。

御存知の方も多いと思いますが、トロントはカナダ最南端に位置する人口およそ250万人のカナダ最大の都市で、歯科界の名門トロント大学歯学部があることから歯科関係の学会などで足を運ぶ機会が多いところです。私は今回初めてトロントを訪れたのですが、“なんて寒いところなのだろう！”という印象が強く残りました。神奈川西部→東京→新潟と段階的に寒さに慣れてきたつもりでしたが、暖かく蜜柑が育つ環境で生まれ育った私にとってトロントはあまりに寒く、昼間であっても口を動かすと頬が痛くなるほどで、外にいる間は喋る気が失せてしまいました。ちなみにトロントの3月の最高平均気温4℃、最低は-3℃だそうで、新潟と比較していずれも5℃程低いのですが、その違いは大きく、真冬に新潟で突風や大雪に曝された時よりもずっと寒さが身にしみました。次は暖かい季節に訪れたいものです。

話を学会に移しますと、本学会は嚥下障害の国際学会にあたり、例年ホテル開催が多く、今回も The Ritz-Carlton, Toronto にて開かれました。DRS は「Dysphagia」という機関紙を持ち、嚥下障害に関連する組織の中では非常に大きいのですが、それでも学会参加者数は総勢300～400名程度と比較的小規模で、会場も口演およびポスター会場が各1ヶ所ずつの計2ヶ所のみでした。日本では歯科が組織立って嚥下障害への対応を行い始めているところですが、アメリカでは SLP (Speech Language Pathologist: 言語病理士) が中心となって嚥下評価および訓練を行っており、今回も SLP が多くの発表を行っていました。発表は健常被験者を用いた研



トロントのシンボル CNタワー

究が中心でしたが、実際の患者データを用いた発表も多く見られ、何気なく過ぎてしまいがちな臨床の疑問に対して真摯に探究する姿勢に多くのことを学びました。

私はラットを用いた基礎研究の発表を行いました。動物実験は本会のメインストリームではないので周りの反応が少し心配でしたが、嚥下の臨床で世界的に著名な Jeffrey B. Palmer 教授が関心を示してくださり、少しの時間ディスカッションさせて頂けたことは今後の研究の励みとなりました。また本年4月より当分野の社会人大学院生となった新潟リハビリテーション大学の高橋圭三先生が、日本人唯一の口頭発表にて大きな反響を得ており、今後の活躍に大いに期待を持てる結果となりました。

また学会期間中には現在 Johns Hopkins 大学に留学している当分野の谷口先生と会うことができ、一緒に参加した井上教授、林先生と共につかの間の再会を楽しみました。谷口先生は持ち前の明るさでアメリカでの生活にすっかり馴染め



左から：筆者、林先生、谷口先生、井上教授（The Ritz-Carlton, Torontoにて）



左から：寒さを堪える筆者と元気な林先生、谷口先生（Steam Whistle 前の広場にて）

ている様子で、留学先での出来事を面白く話していたことが印象的でした。学会終了後には谷口先生と一緒に Johns Hopkins 大学を訪問し、本年10月から私の留学予定となっている研究室を

見学して帰国の途につきました。来年の学会はシアトルで3月13～16日の日程で開催される予定ですので、機会があればまた参加したいと思います。

